慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十四年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三五七号）

目次

信楽開発……近角常観……(1)
愛別に悲しむ人に……菅瀬芳英……(9)
自照日誌抄（一〇）……西元宗助……(11)
一道会の記……榊原徳草……(13)
念仏詩抄……木村無相……(17)
摂取不捨……石田十九三……(20)
新春法信抄……(24)

第三十一巻　第三号

信楽開発

近角常観

信巻別序の最初に

夫れおもんみれば信楽を獲得することは、如来選択の願心より発起す。真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり。

といわれた。信仰は我々が求めたので得られたのではない、仏陀の慈悲によりて与えられるのである。仏陀の慈悲は南無阿弥陀仏である、光明である。この名号の父と光明の母とにより生み出された信心である。これによって如来の慈悲をば利他の願海とも名づける。利他というわけは、我等から進んで救われるでなしに、仏陀から救うて下さるのである。そこで他力という意味は仏陀から手をくだして下さるので、この仏陀の慈悲の御手が我等にとどいて下さったところが信仰である。換言すれば絶対と相対との一致である。この一致ということを半仏半人の持合と考えるから、絶対他力の信仰が味えぬのである。真実の信仰の上では、仏と人との持合せではない。勿論、南無阿弥陀仏は仏のものなれども、それが我等の口によって称えられるところの信心である。信仰はまた固より我等の心に出て来るに相違ないが、それが全く仏より来ったのである。だから絶対と相対の一致というのは水と油とを一つにしたようなことではない。我等の信仰は仏力の外にはない、仏心と凡夫心と両者の寄合いでなくて、広大な仏の恵みがまるまる我等にあらわれて下さるのである。これが絶対他力の信仰の妙味である。

我等の心中に仏陀の真心が到着して、あたかも蓮華の開くように、わが心が開けて、しみじみと仏陀を喜ぶ心がおこるのであって、これ全く仏陀の偉大なる力である。わが身にいつとはなく仏の慈悲が有難く思われて疑わんとしても疑われず、真に心の開けてきたのは、自分がかく有難く思おうとして思えたのでなく、全く如来選択の願心から発起せしめられたのである。たとえば、親が子を可愛い〳〵と常に断えず思うていて下さるので自然に子供の心に親は

有難いという心が起ったのである。親鸞聖人が

「それ信楽を獲得することは如来選択の願心より発起す」

と云われたのは、一寸聞くと何でもないようであるが、このように云われるのは決して偶然ではない。私自分のことを回想するに、或は宗教上の事を憂い、或は友人の事を憂い種々なる人生実際の出来事にあって種々に考えた。それがために永い間、自分の胸中に安心ができず、大いなる苦に陥った。何とかして安心を得たいと悶えに悶えた最後において、仏陀の恵みが私にわからして下さってアア有難いと喜んで安心することが出来たのである。ここにおいて、つらつら思うに、久しい昔から私に種々に恵みをかけて居て下さった仏の真実の願心、念力が私にとどいて下さったのであった。これから思うに、信巻は聖人の実験の直写である、聖人の胸中には人生百般の出来事、みな我を導いて下さる如来の願力のおはからいであって、釈尊御在世当時の王舎城の大悲劇も別事ではない、色々と手を回して、すべての人々を信仰に入るように導いて下されたのである。ここを「真心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顕彰せり」と申されたのである。そこで、我等が回り回って仏の恵みに入って有難い心になったのは、ひとえに仏陀の願心のたまものであると感謝して居られたのである。このように如来選択の願心と大聖矜哀の善巧とをお喜びになったこころを和讃に

釈迦弥陀は慈悲の父母　種々に善巧方便し
我等が無上の信心を　発起せしめ給いけり

と讃歎せられている。我等はこの和讃を口先で誦んで仕舞ってはならぬ。或は財産を失って驚いて信仰に入るものあり。或は愛妻愛子を失うて驚いて信仰に入るものあり、或は一家が平和で楽しいところから信仰に入るものあり、其他すべて人生百般の出来事、小にしては一家の不和より大にしては世界の紛争までが、かならずやついにはこれによって目を瞠まして信仰に入らねばならぬように余儀なくせられるのは、あきらかな事実である。

以上のように人生の出来事から余儀なくせられて仏の恵みの懐に入らねばならぬようになって、大いに喜ぶようになったのは、つまりは久しい以前から釈迦弥陀二尊の慈悲の父母達が、種々の善巧方便をもって我等に広大な恵みをとどけて下さった仏陀の念力のあらわれである。この方便ということについて世間には嘘も方便という諺がある。仏教の方でも権化方便とか、善巧方便とか種々の名で方便を論じているが、私が考えるに、いずれもみな我等を導いて仏陀の恵みに入らしめようとされる、慈悲善巧の手段であるから、善巧方便の外無いと思う。蓮如上人の御一代聞書に、

「方便をわろしということはあるまじきなり。方便をもて真実をあらわす廃立の義よくよく知るべし。弥陀釈迦善知識の善巧方便によりて真実の信をば得ることなるよし仰せられ候。」

又、末灯鈔にも、

「この信心を得ることは弥陀釈迦十方諸仏の御方便よりたまわりたりと知るべし。然れば諸仏の御教をそしることなし、余の善根を行ずる人をそしることなし」

というてある。ややもすると何気なしに信仰を発したように思うが、その実は、大聖釈尊をはじめとして諸仏菩薩みな同心に広大の恵みを我等に与えんがための善巧のはからいによって信仰に導いて下さったのである。これに気づかぬから自分で信仰をつくらうとするあやまりに陥りやすい。そこで信巻にはまた、

「然るに常波の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じ難きには非ず、真実の信楽実に獲ること難し。何をもっての故に、いまし如来の加威力に由るが故に、博く大悲広慧の力に因るが故なり」

と云うてある。如来の威力が加わって下されたから信仰に入ったのである。広大な智慧の御力が加わって下されたから真心を獲たのである。われ自らの力によって作った信心ではない、偶然に生じた信心でもない。私如き浅間しい罪業深重煩悩熾盛の胸中に、仏の恵みを喜ぶ心が生じ来って、称名歓喜することの出来るのは、全く仏陀の真実から与えられたのである。この信心を金剛不壊の真心とも真実の信楽と名づけるのはこのためである。

然るに自心に仏陀を作り出して、これに対して有難く思おうとするのは、元来が凡夫の心であるから、真心とも不壊とも云えない。唯はからわずに仏の恵みを有難いといただく信仰ばかりが顚倒ならず虚偽ならざる真実の信心である、その信仰の内面の状態は如何というと、一面は我身が悪いものであるという自己の価値が分って、一面はこのような自己を救いたまう仏の恵みを疑う事が出来ぬのである

善導大師はこれを

一には決定して深く自心は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなしと信ず。

二には決定して深く彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂受して疑いなく慮りなく彼の願力に乗じて定んで往生を得と信ず。

と云われた。これを古来二種の深信、即ち機と法の深信と名づけてある。今この実際の心中を譬えてみれば、刑務所の囚人が一回ならず二回ならず犯罪に犯罪を重ねて度々入所して苦しんでいる。囚人の心情を察して見ると、ど

うかしてここを出たいと思うているが、どう思っても出られない。そこでどんな凶悪なものも、出所の後は改心して立派に社会に立ちたいものである、この次にいよいよ出所したら改心しようと思うている。これを他から考えると如何にももっともな考えである、もっともではあるが、果してその囚人が社会に出たら立派に改心が出来るかというに実際はそうはいかぬ。囚人自身は改心して立派になる積りでも、まず自分の罪悪をおおう虚栄心のために、なるべく他人が身の上を知ってはならぬと世間を狭く見て百方心配して、そのために業務も手につかぬ。又親に対しても隔て心をもって向い、親も寄せつけてくれぬだろうと思うて親の処へ帰ることもようせぬ。親許へも帰らず、働きもせず、世間をへだてて苦しんでいるから、遂にまた罪を犯して刑務所へ舞いもどって来るというようなものである。

信仰問題もこのようである。常に云うように私の信仰で云うてもそうである。自分ではよくならねばならぬ、人が自分を悪く思うても、こちらでは先方を悪く思うてはならぬ、心を清くせねばならぬ、誠実でなければならぬと思うて、朝夕に誓って見たり、日記を書いて見たり、一日どうかよくしようとかかっていても、夕方になってみると駄目である。一日はどうかこうかやれても翌日は駄目であるという次第で、今日こそは、今日こそはと気を張っているが一年中とうとう駄目に終ってしまいました。丁度囚人がこの次には改心せん、この次にはと勤めてみても、如何にしても出来ぬと同じであります。

どれだけやってみても善くなり得ぬ。右に向っても心がへだてる、左に向ってもへだてる、右にも左にも動けぬ、善導大師の実験にもとづく二河白道の吐喩の様に、右からは群賊、左からは毒蛇、その間にまた異学異見のために惑乱せられて、一層ああしたら、こうしたらと一向に心がきまらぬ。右にも左にも進退きわまった状態を世間の人は、これを罪悪観というたり、或はこれを機の深信であるかのように云う者もあるが、それは誤りである。

一寸考えると「我身は罪悪の者なり出離の縁なし」という善導大師の告白はこの苦しい境遇を云われたように思われるが、決してそうではない。今頃、学生などが自分は罪深き者であると苦しんで煩悶しているものが少くない、又信仰を求めてその話を常に聞いているものでも、我のような者はとても救われないと歎いているものがある。それらは煩悶状態で決して罪悪観ではない。かの囚人が、自分は如何にしても駄目であるが、それでもどうかして改心したい、或は大発明でもするか、奇抜な行いでもして、金儲けでもして好い境遇を開きたい、善くなりたい、成功したいというているうちに、ついに又第二の犯罪をするのと同じ

である。学生も、求道者も、我身は罪深いものであると如何に思うてもそれでは安心して居られぬ。唯歎いて日夜苦しむばかりである。彼の千仞の断崖から落ちかけた者が、草の根や、木の株をつかんで、立っても居られぬ思いでしきりに苦しんで居るような心地である。これはまた信心ではない。囚人がどうかして成功したい、何とかせねばならぬ、親許に帰るにも好い結果を握って帰らねばならぬ、たとえ出来ぬまでもせねばならぬと思うのは、まだ親の真の心がわからぬからである。

そこで、そうした囚人が、どうして安んずることができるかというに、何も他の事はない、親の心を知らしてもらえばそれでよろしいのである。一般の囚人も親を全く知らぬとは云わぬが、親は私如きものを一向振り向いてくれませんというものが多い。人生を色々考えても、神も仏もありはせぬ、人間とても皆温かい情などはないと、このように思っているのはこの囚人と同じ心持である。これらは余程ひどい例であるが、一歩進んで、少し気がついて神仏でなければならぬ、人間は皆罪悪のものである、どうしても人間以上の力によらねばならぬと云うている。それなら、この人は真に仏陀が解っているかというにそうでない。これは丁度囚人が親は私如きものを憐れんで下さる、自分にどんな間違いがあっても、それを色々と善く思うて下さるが親であると云うているから、真実に親がわかっているかというと、口では親は有難いと云うているが、心底には親の真実がまだ分って居らぬ。その証拠には直に親元へ帰らぬ、何故かと尋ねると、親は寄せて下さるけれど、チットは善くなって帰らねばすまぬ、立派な服装をして帰らねば面目がない、どうか世間の面目をよくし土産でも持って帰りたい、このままでは如何にも恥かしいという気分であるから直に帰られぬ。

信仰問題もこれと同じところにとどこおっているものが少くない。自分は如何にも悪いものであるが、仏陀はこの如き者を助けて下さる、実に有難いと口では云うている。或は只の只である、自分は何にもいらぬと云うている。しかも心底から真実に自分を恵んで下さる仏陀が有難いということに気づいて居らぬ。唯自分の心をとり立ててこのように思うて居るだけのものが多い。疑いなく慮りなく彼の願力に乗ずる、のでなくて、彼の願力に乗ぜずして自らこのように思うことで、われ得たりとしている。一面には出離の縁あることなし、と云いつつ、なおどうかして出離し得るかのように思い、一面には疑いなく慮りなく彼の願力に乗ず、と云いながら、なお疑うまじとこころを労して、大悲の御力によらずにいる、全く似ても非なる信仰である

然るにいよいよ如来の広大の御恵みを聞かされて見ると

何かなしに一筋に如来のお恵みに感泣して喜ぶより外はないことになる、ここが真正の信仰の極致である。前記の囚人の例にしてみると、親は汝如き者は失敗堕落のけしからん者だから帰って来るなでなしに、「自分のような不孝者を昼夜すこしも忘れずに待って居て下さるのであったか」と真に親の心を聞かされてみると、心の奥底からアア有難いと喜ぶばかりである。この時に、罪があるから帰られぬの、衣裳が悪いからの、土産物が無いからのと云うて居る余地はない、直に飛んで帰るばかりである。すでに罪悪に陥ったものがよい加減に自分の力で立派になれると思うのがあやまりである。真実に自分の悪いことにめざめたものは、自分は仕方のないギリギリである、崖の下に落ちてしまうた仕方のないものである。親はそのようなものが立派になって帰るとは決して思うて居らぬ、唯もう何かなしに直に帰って来よと云うて下さるのである。いよいよ崖の下へ落ちるより仕方のない者の上に、早くから一仏名号の綱が下ってあるから、これを安心していただくなり、煩悶の手を放つことができるのである。唯信鈔に

たとえば人ありて高き岸の下にありて上ること能わざらんに、力強き人、岸の上にありて綱を下ろして、この綱にとりつかせて、われ岸の上にひきのぼせんと云わんに、ひく人の力を疑い、綱の弱からんことをあやぶみて手をおさめて之を取らずば、さらに岸の上にのぼることを得べからず、ひとえにその言に従うて掌をのべてこれを取らんには、即ちのぼることを得べし。仏力を疑い願力をたのまざる人は、手をおさめて綱を取らざるが如し菩提の岸にのぼること難し、ただ信心の手をのべて誓願の綱をとるべし。仏力無窮なり罪業深重の身を重しとせず、仏智無辺なり、散乱放逸のものを捨つることなし。ただ信心を要とすその外をはかえりみざるなり。

とある。綱につながれよと云う如く、仏が綱をさげてつかまえて下さるから、自分があがかずとも手が放される。あがくのはまだ罪悪の凡夫ということに虚栄心がまつわるからである。自分も悪いものであるが、人もまた善からぬものであると思うのは、まだ自分は至極の悪人なりと思わぬからである。親の自分に対する慈悲の広大なことを思えば、今までは親を忘れて、親の恵みに気づかなかったのであった。親が知れぬから曠劫以来今日まで、このために迷い、このために流転してきたのであった。自分がりきんでやっても、どんなことがあっても、この三界の牢獄は出られぬのであった。この如き者を捨てずして直に帰り来れと呼びたまうは、大悲の御親ばかりである、ああ有難い、実に親の恵みが尊いと気づいたところで、はじめて安心して苦悶がなくなる、そこではじめて自己の価値がわかって真

の罪悪観がおこるのである。

このように親の恵みに気づくことのできるのも、独り考えて気づくのではない。父親は寄せつけぬと叱る、母親は帰って来いわびをしてやるからという。親戚や朋友からは老いた親が心配している、早く帰って来いと勧めてくれる。それがために囚人の心に成程親は有難いという心が起る、ここを「信楽を獲得することは如来選択の願心より発起し、真心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顕彰せり」といわれるのである。

はじめの頃は囚人が、父親が今のように叱るとその言葉を大層苦にして、親の恵みという点は一向にわからぬように、釈尊が「唯五逆と正法を誹謗せんをは除く」というのを聞いて、自分の様な五逆の罪人は到底たすからぬと力を落すか、もしくば母親が帰って来いわびてやるというから悪くてもよいのだと云うている如く、我は罪悪深重の者なれども、仏はこれを許して下さると思うている。いずれも誤りである、親心が解らぬのである。親の真の有難味がわからぬものは、仕事に精出しもせぬ、悪事もやめぬ、でなければ気兼ねして苦しんでいる。それにくらべ真に親心が解ってくると、叱られた時も、真実叱って下さるのは親ばかりであると喜び、愛して下さるにつけ、自分の様な不孝者をそのように云うて下さるは勿体ないと、叱られても、愛されても、どちらも有難く頂けて、何の遠慮もいらず親の家に帰って行く。信仰問題もまたこのように、大悲のみ親の恵みの聞えた瞬間、かの願力に乗じて一点の疑慮もなく、定めて往生を得と安心する、これが信楽開発である。身は鉄窓に在っても心は親の処に帰って居るのが、所謂正定聚であり、即得往生である。

慈悲がわかっていないと、たとえば、囚人が常にひもじく感ずる、どれだけ食うても足らぬ、又何事にも不満足であって、そのため仕事が苦労でならぬ。その上所員を仇敵のように思うから、その人達からも同情を失うてしまう。もし一度、慈悲が分って来ると、心がすなおになり、所員からは自然に同情して貰え、また不思議にも与えられたものに満足もするし、仕事も楽しんで働くことが出来る。したがって仮釈放の恩典にあずかれるようになる。しかも囚人そのものはそんな恩典など予期して居らぬから、それを申し渡されたときは意外千万であると非常に喜ぶ。

もしこれが、人間の計いで改心をよそおうて一時謹慎をして立派になって、刑期が満ちて社会へ出てみると、中心の心が開けて居らぬから気が隔てて身の置きどころがない、そのうちに又再び刑務所へ戻って来ねばならぬようになる。つまり、身は釈放されても心がつながれて閉じているためである。これにくらべ在所中に信仰に入ったものは

すでに心は家庭に遊ぶのである。釈放されると直ちに飛んで親の家に帰って行く、今我等も亦これと同様である。

思うに三界は牢獄である、極楽は仏の家庭である。その一如法界から形をあらわして親心を知らしめようために釈尊も十方の諸仏も、その他の大聖達も、この人生に出現して下されたのである。我等この仏陀の教を聞いて有難いと喜ぶとき、この世の牢獄にあって、早くも心は極楽の家庭に帰っている。そこでこの人生の苦悩は苦悩でなく楽しんで人生の本務に従うてゆく、而もこの生命の終るとき直ちに浄土に帰ることができる。

ハ、ヒ、ウ、ベてきた信仰の内面の味いは、善導大師の水火二河の譬の上に丁寧に説いてありますから引き合せてお味い下さるように望む。

法　信

柳瀬留治

今日はつい大晦日になりました、何卒お健やかに年を越して下さい。

念仏の行者、久保田明聖さんが遂に暮の二十四日に往生いたしました。一昨二十九日、東京の全生園の真宗会館で葬儀に、念仏の同朋や、歌の仲間達が相集まり、阿弥陀経正信偈を助音し、香を手向けました。

有難い遺詠を残して死にました。七十八歳でした。

久保田　明　聖

○

わづかなる視力に頼り生きて来し老いのつぶやきナムアミダ仏

冬の蠅、膝に遊ばせ生きのびし命かなしもナムアミダ仏

○

ああ久保田明聖

柳瀬留治

視力失せ昼も真闇に病み臥して死ぬを淋しみ念仏しゐむ

六十日も注射のみにて痩せやせてあはれ明聖生きておりしか

医師(くすし)には生き得む日限(ひぎり)見えけむか逢ひたくは来よ三日中にと

八十六のよぼよぼ老の独りゆき危しよとて妻同じざる

忙しき師走の今日を我つれてたぶる人なし暫し死なでゐよ

生ける中に言はむ一言ただただに念仏のみによりて行けとぞ

暁(あけ)の四時に明聖死すと聞き終りただに合掌し眼つぶりぬ

明聖の葬りに行かむ和江が顔電車が吐ける群よ出で来ぬ

全生園療舎広々並びをれ友が葬儀場知る由あらず

亡き君に香をささぐるその友ら指なき双手に挾みてはなす

明聖遂に盲いて死にぬその友も大方盲となりて集へる

武蔵野の空はれ渡る小春日の葬り長閑けし念仏のこゑ

（一月号・短歌草原誌より）

愛別に悲しむ人に

菅瀬芳英

恩愛はなはだたちがたく
生死はなはだつきがたし
念仏三昧行じてぞ
罪障を滅し度脱せし
生死の苦海ほとりなし
ひさしくしずめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける

○

四苦八苦とは経に説いてありて、其中の愛別離苦と云うことは、このたび身にしんで感じられたことである。このようにつらい思いをせねばならぬなれば、親子の縁を結ばねばよかったのである、今となって考えると親子の縁を結んだのを怨めしく思うようになってくるのである。

なぜ生れたのであろう、なぜ死んでくれたのであろう。思えば思うほど、考えれば考えるほど愚痴が出て、どうしても思いあきらめることは出来ない。思うまいとおもえば思うほどむらむら起りてくるのである。

平生より法を聞いておるのであるから、このような気の弱いことではならないと、幾度も思い返そうとりきんでも駄目である。こうなると泣くより別に道がない、これが泣かずに居られようか。どうしても心が承知しない。ただ無意識的に涙が出て、泣くより外にすべはない。一夜も二夜も泣きあかし、三晩も四晩も泣き、夜も昼も泣きどおし、一層泣いて〳〵泣き続けたいものである。

ここに到りて思い起し気づかして貰うのが大悲の親様である。御身が子供のために泣いたよりも、なおなお長く泣いてござるのが大悲の親様である。我等のために、久遠劫来泣きづめが親様であったのであると、このたびのことで愛別離苦の幾分のことを知らして貰うたのである。大悲の親様は、このことを早くからお知り遊ばし、そのつらい思いより四苦八苦の迷いの中に沈んで居るのを御覧遊ばして

慈悲をたれて下されたのが大悲の親様である。我等の苦しんで居るとき、一処に苦しみ、我等の泣く時、一処に泣いて下され、我等が慶ぶとき、一処に慶んで下さるのが大悲の親様である。南無阿弥陀仏、々々々々々々。

○

先日ある奥様が子供を亡くせられて非常に落胆して居られて日々愚痴をこぼして泣いて居られたのである。その家は神道であり、奥様の里は禅宗であるから、宗教というような考えはすこしもないので、余程困難して居られた。

ところが、其人の友人に法を聞いて居る人があって、宗教の話を聞いたらよかろうと云うことから私が頼まれて、法話をしたのである。

何分に始めてのことであるから話すことがしにくかったが、前述のように、泣いて泣いて泣きつくしなさい、その泣いたときの思いの上に、このように泣いている自分よりも長々泣いて居て下さったのが大悲の親様であると話したら、非常にそのことが胸にとまり、如来大悲の親様に気づかれたのである。

自分は宗教の話をきいたら、あきらめよ、思うな、愚痴こぼすな、忘れよ、といわれることであろうと思うて、余程覚悟して参ったのである。あまり子供に別れたのがつらいので充分に決心して参ったのに、そんな決心も覚悟もいらないで、自分も同様に泣いて、自分が泣いているよりもなおなお泣いて下されるのが大悲の親様であると聞き、真実の同情者はこの世の中には大悲の親様であると気づかして貰うて、はじめて胸が晴れたようであると語られました。

南無阿弥陀仏、々々々々々々、唯々このうえは御恩の称名より外に要のないことにさせて貰うたのである。南無阿弥陀仏、々々々々々。

仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられて、いよいよたのもしく覚ゆるなり。

とある。我等どもの迷夢中に苦しんでいる煩悩具足をご承知遊ばしての上の大慈悲がありがたい。吾等の往生は仏様の方よりお定め下されたのである。

迷中にありながら迷いを知らないものが、種々なことに出遇わして貰い、如来様の慈悲に気づいたのである。かくて遂に如来の真実がわが身に引き受けられることになったのである。「不可思議の願力として仏のかたより往生は治定せしめたまう」とある。仏のかたよりと、向うが先にきまったから、疑い深い吾等があなたにおまかせすることが出来たのである。「如来わが往生を定めたまいし」と蓮如上人がお慶びなされたので、如来わが往生をとの仰せがありがたく、真に力強い、南無阿弥陀仏、々々々々。

自然日誌抄（一〇）

――ご正忌――

西元宗助

お正月がすぎると、お西のご正忌（しょうき）報恩講。ご本山からのご招待は、一月十二日であったが、この日は残念ながら大学の講義日。よって前日の十一日に、お詣りさせていただく。

九時すぎにご本山の御影堂に参じると、さすがはご正忌、あの広いみ堂にいっぱいの参詣人。しかもご婦人には紋付姿の方もいられる。まず「門信徒のつどい」、その間、若いご僧侶によって心身障害児等のための募金も行なわれたりしているうちに、いよいよ定刻となって、ご門主も座席におつきになり、入出二門偈作法によるご法要が、師主知識の恩徳はと、厳粛にとり行なわれる。私どもも静かに唱和したが、なにか慚愧の念でいっぱいでありました。

やがて、ご退出される門主の後姿をお見送りしたあと、わたしはまず久し振りに宗務所に立ち寄りましたが、豊原先生（宗務総長）ご病気不在とのこと。よって内事室に赴くと、思いがけなく、大谷邸に通ずる廊下でパッタリと前門さまにお目にかかれて、はれやかに新年をかねてのご挨拶。それから前お裏さまにも。

なお折角、ここまでまいっておりながら、ご門主にひとこともご挨拶もせずに帰えるのは心残り。それで内事係の先生に、その旨を伝えると、ご都合伺ってみますからとのこと。そして、待つ間もなく、どうぞとのことでありましたので、さっそく靴をはいて、別館の内玄関に入ると、範子お裏方と淳（あつし）さまがお迎えくださる。たしか満一年半余でいらっしゃる淳ちゃん、あまりにも可愛いので思わず〃小公子〃（バーネット女史の小説の主人公）のようと申しながら、そっと抱きあげると、ずっしりと重くて頼母しい。それに物おじされないで、わたしに抱かれたままでおありなさるのに感心。

思いたった突然の訪問であるし、ご挨拶もそこそこに失

礼辞去しようといたしますと、ご門主がにこやかに、まあ、お上りくださいと仰せくださったので、それではと、お言葉に甘えて、ちょっとだけ上らせていただいた。

○　○

年賀状が正月の中旬をすぎても続々と到来する。入院中の木村無相さんの賀状には、病むベッドあおむいて書く年賀状、とあって、特に「念仏は命なりけり」と朱書されている。無相さん、ともかく、ながいきして下さい、たのみますと、つぶやく。

○

『大乗』（西本願寺刊）新年号に、榎本栄一さんの詩が載せられていた。心うたれましたので勝手ながら、その一つを紹介させていただく。栄一翁のご健康も案じながら。

現世功徳

南無阿弥陀如来は
私の底なしの
憍慢心を
毎日　照らしてくださる

○

前後しますが、恩師福島政雄博士のお命日がまいります。（二月三日）先生の昭和四十九年の春の日記に、四月十七日、京都にて、西元君と宮地（註・廉慧）君、と前置きして、次のお歌のしるされてあることを、先生の奥さまからの最近のたよりにお報せいただいて、追憶をあらたにする。

西の京に三十年の法の友　こころを語る春雨の宵

○

高倉会館の「ともしび」に、曽我量深師のご生前のご講話の一端が、巻頭にのせられている。ありがたいお言葉はなんど拝聴してもありがたいので、自分のために左に記しておく。

「わたし、思うにですね、たすける―たすかる、と。助けるは仏さまのほうにある。助かるはわれわれにある。いくら助けるというても、助からんけりやしょうがないですよ、これ。助かるはわれらのほうにある。助けるは仏さまのほうにある。助けるは仏のご本願、助かるはわれらの信心。いくら仏さまが助けようとおぼしめしてもわれわれがですね、われわれが本願を信じなけりゃならん。だから、われわれの信心というところへきたって、信心決定するというところへきたって、はじめて廻向（えこう）―廻向が成就したんである、云々。」

（一月三十一日、誌す）

一道会の記

榊原徳草

次いで花田正夫先生のお話は次のようでありました。

○

只今も西元先生が一期一会の趣きを話して下さいましたが、私も幸に今日皆様とお目にかからせていただき有難いことであります。

向島先生も亡くなられました。先生は私が京都へ来て間もなく、今は亡き松本解雄先生と共に念仏のよい友となって下さいました。そして知四明寮に念仏の灯が点っていったのであります。あれから四十余年の間、地下水が通うような親交をいただいていましたが、今やお浄土からご照覧下さることになりました。謹んで地上でのお別れをお悼み申し上げます。南無阿弥陀仏、々々々々々々。

さて、最近感じていることを申し上げます。それは、ずつと前に何の気なしに過ぎてきた経験が、年月を経て思い出してみると、それが大変なことだったと気づくことがあります。僅かな一寸した経験が心に根をおろし枝を出し大きくあらわれてくることがありますので、そのことを申上げてみたいと思います。

私が四十二の時に日本が敗れました。名古屋も東京も大阪も焼野が原になり、人人は衣食住を求めて右往左往しており、日本人から笑いが消え、歌も忘れておりました。そういう中にあって、私は私なりに、今こそ聖人のお導きをうけて、仏の大慈大悲のみ心にうるおうてゆく、その外に光明はないと信じ、欺異抄一冊を持って馳けずり廻っていました。それが生来弱かった心臓に故障をおこし、四十七才の夏に狭心症の発作を繰り返し、名大病院で診て貰い、心筋障害による発作ということで一ケ月ばかり入院しました。そこで「ヒビの入った茶碗も大事にすれば長持ちする、一病長寿という諺もあるから、せいぜいお大切に」と慰められて退院し、外での仕事を全部お断りして、家に閉じこもることになりました。そうなりますと家内は封筒の表書きやら、刺繍等と内職を探しはじめました。さて私はこ

れからどう生きてたらいいのか、蟹が手も足ももがれた状態でどうやって生きていったらよいのか、とつおいつ考えておりました。当時、焼けのこった三軒長屋の真中に住んでいましたがフト裏庭を見ると一本のへちまが垣根にのぼっていて、黄色な綺麗な花をつけていました。当時まだ食料不足で、花より団子の時代でしたが、あまりに鮮やかな黄色の花なので、つい見とれておりますと、どこからともなく一匹の蝶が飛んできて蜜を吸い始めました。それを見た刹那、ハッと心を大きく打たれたのです。それは、花は別に宣伝もしないのに、花が咲くと蝶が来る、そして蝶は蜜を吸い、へちまは花粉を媒介されて実を結ぶ、そこに大自然の大調和の世界を知らされたのです。良寛さんの詩に

花無心にして蝶をまねき、蝶無心にして花を尋ぬ
花開く時、蝶来る、蝶来る時、花開く、云々

とあるのも、この自然の妙趣に感動されたのでありましょうか。私はそこで、自分の一生はひょろひょろしたへちま同様の身体であるが、一日一日いただくお念仏の花につかえてゆこう、蝶が来ようが、蜂が来ようが、また来ないかも知れぬが、ただひとつ念仏の花につかえてゆこう、と腹がきまったのです。その時の腰折に

生かされて　生くばかりなり　みほとけの
ふかきちかいの　あるにまかせて

と日記に誌しました。

こうして私の行く道がきまった時、あらためて身辺を振り返ってみますと、家に閉居していても、まだ本が読める、ペンを持つことが出来る。小冊子ながら一年前から慈光誌を発行している、これで独座のまんま念仏の友と心の交流をさせていただける道は開かれているのを見出した。

それにつけても文字（ことば）のあることの有難さ、このお陰で、過去の人、聖人方にもお会い出来るし、遠方の友とも通信出来、更に自分が亡くなっても後の人々に語りかける道が開けていたと驚きの眼を見張りました。それまで文字（ことば）を自分の使用人のように軽くあつかっていましたけれど、文字の時間や空間に障えられずに自由に働くに比して、人間の働ける範囲の狭さと、生命の短かさを思った時、はじめて文字（ことば）を三拝九拝し、これからは自分が文字を使うのでなく、文字に仕えて、大きな文字の中で自分を生かさせてもらおう、と独語しました。

それと同時に、阿弥陀仏が、御名、名号となって私共に救いの手をさしのべて下さることの一大事に括目いたしました。もし姿形あるものとして現われて下さるとやがて消滅から逃れられません。。弥陀仏の応現として釈尊が出世して下さいましたが八十年で入滅されました。時代を超え場所を超えて働く、ことば、南無阿弥陀仏の名号となって

現れて下さる有難さ、そこに何時でも、何処でも、何をしていようとも、御名となって救いの御手をさしのべて下さることのたのもしさを改めて仰ぎました。

今まで、どうしようか、こうしようかと苦しんでいた私が御名号につかえる道一つが知らされますと、明るい光に照護されて、身辺に限りのないお慈悲のみちていることにおどろくばかりでありました。臼杵祖山老師の遺詠に、

大いなる恵みの中にめぐまれて
　　めぐみも知らで　みめぐみに生く

とあります。これは師が直腸ガンで死を自覚された頃のお歌でありました。又、良寛さんの歌に、

やちまたに　ものなおもいそ　弥陀仏の
　　もとのちかいの　あるにまかせて

と、あれこれと心配は無用である、弥陀仏がその一切を見抜かれて救い遂げずばおかじとお誓い下さっているからとの讃仰であります。

以上が私の四十七の時の所感でありますが、七十五も近づきました今、このことを振り返って、このことは大きなことを教えられていたなあと、あらためて知らされました。と云いますのも、教行信証の総序に「悪重く障り多き者、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉（つか）え、ただこの信を崇（あが）めよ」とあります。ここの、この行に奉えよ、の一句が、私に大きく響くのであります。この行とは、南無阿弥陀仏、これにつかえよとあります。白井成允先生は「奉えよとは、敬いたもつこと、受けることと字典に出ている。奉えるとは自分がどうこうすることでない、敬いたもつ、お慈悲を受けとることである、お慈悲のお念仏をいただいて敬いたもつことで、これが奉える道である」と仰言っています。

自力で称える念仏は自分より小さいものである。お念仏の中に生かされる自分、そこにつかえて、敬いたもつばかりであります。それについて、念仏して善くなろう、罪を消そうなどと思うのは、お念仏を利用して自分の願望をかなえようとする、自力の念仏であります。くり返しますと私共の煩悩の隅から隅まで見抜かれて、私のたすかる道を成就して下さったお念仏を敬いたもつ、いただくばかりであります。このおもむきを歎異抄の十三章に「されば善きことも悪しきことも業報にさしまかせてひとえに本願をたのみまいらすればこそ他力にては候え」とあり、自然法爾章には「自然というはもとよりしからしむるということばなり。弥陀仏の御誓いのもとより行者のはからいにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまいてむかえんとはからわせたまいたるにより、行者のよからんとも、あしからんともおもわぬを自然とは申すぞときて候」と聖人のご晩

年のおことばにあります。更に思いつきますのが、教行信証の行巻の終りに正信偈を出される前に、曇鸞大師の論註を引かれて「菩薩の仏に帰するは、孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動静おのれに非ず、出没必ず由あるが如し云々」とあり、これが「親鸞別にめずらしき法をひろめず、如来の教法を我も信じ人にも教え聞かしむるのみ」の御心底であります。

歎異抄の第二章「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」と、具体的に、聖人の御胸底を告げて下さっています。好き人法然上人を通して、ただ念仏して、と如来の御呼声を聞かせていただくばかりである。「たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄に落ちたりともさらに後悔すべからず候」と、後悔しませんとりきむのではなく、後悔するところはありませんと、素直にうけて居られます。これが、よきこともあしきことも業報にさしまかせて、ただ念仏一つにつかえられたお姿であります。

このように、結果如何に目をかけず、御廻向のお念仏一つを頂く時、願わず求めないのに、如来の御はからいによる自然のめぐみを蒙るのであります。自分のことを申して恐縮でありますが、心臓病やら膀胱腫瘍になりまして「病もまた善知識なり」と云われた永観律師の仰せをなるほどとうなづかせていただきました。病気は一番いやでありますが、それによって、丈夫な時には気づかなかった種々なことも気づかせていただき、仏恩の深いことを身にしみて知らされますにつけ、病気したお蔭様であった、と自然にうなづけたのであります。これは現生十種の益の一つ、転悪成善、衆禍波転の片鱗といただいております。

以上は皆、如来のお誓いの自然のめぐみでありまして、私が求めて得られたものではありません。唯ここでも一番大切なことは、「ただこの行に奉えよ」とありますようにわが身のよしあしを問わず、御廻向下さる大行、南無阿弥陀仏につかえまつることがかなめであります。しかも、太陽が出ると星の光は皆うばわれて、地上で灯火も無用となります。昼提灯を持って歩けば大馬鹿者の代表になりますが、念仏無碍の光照のもとに、自力の提灯は無用となり、念仏には無義をもって義となす」と申す味わいもいただけるのであります。

重ねて申上げます。弥陀仏に手をひかれて行く旅は明るく、楽しく、賑やかでありますが、これひとえに仏徳の自然の恵みで、私共が願って得られたものではありません。これで終らせていただきます、ありがとうございました。

念仏詩抄

木村無相

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

時々　刻々が

和上おおせに
〝芭蕉に辞世の句なし
一句一句がみな辞世
なること
いかにいわんや仏者
においておや
時々刻々が臨終なり〟

時々刻々が臨終なり
今日ただ今が臨終なり
ああ

とても地獄は

和上おおせに
〝気づかいさせまい
銭（ゼニ）使わせまい
と思うほかなし
追従（ついしょう）と
物もらうのが
スキでキライ―〟

ところがそれが
スキでならぬが
このわたし
〝とても地獄は一定
すみかぞかし――〟

和上＝禿顕誠師

死ぬるも　今
堕つるも　今
お助けも　今

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

浄土真宗にては

〝和上おおせに
浄土真宗にては
自力を捨つるも
他力に帰するも
皆善知識のおす
すめによる―〟

聖人おおせに
〝親鸞におきては
ただ念仏して弥
陀にたすけられ
まいらすべしと
よき人のおおせ
をかぶりて信ず
るほかに別の子
細なきなり―〟

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

もらう

和上おおせに
〝聞くのが
もらうのじゃ―〟

聞くは
聞くでも
お聞かせの
お声のまんまが
おもらいじゃ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

聞けよ聞けよは

和上おおせに
〃名号のイワレ
聞けよ聞けよと
仰せらるるが
ただちに御廻向の
大信心じゃ――〃

聞けよ聞けよは
大悲の仰せ
大悲廻向の
大信心の仰せ
仰せそのまま
信の声――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

あおぐばっかり

和上おおせに

〃今死ぬる
今堕つる機を
今のお助けと信じて
ただ今ばかり
ただ今ばかりと
大悲のお助けを
あおぐばっかり――〃

あおぐばっかり
あおぐばっかり
ただ今の大悲を
ただ今の大悲を
ただナムアミダブツ
ナムアミダブツと
あおぐばっかり
あおぐばっかり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

摂取不捨

花ほころぶ

御本尊様が私一人を救わんとお迎えくだされるように思われて、又そこに歓喜の涙にぬれながらお念仏と涙ばかりでした。今までは偶像とばかり思っていたことを愧じ入りました。また私のうしろに先生方の合掌して下さっているのを知り、私もまた先生方を合掌いたしました。

そのとき会場に居られた皆様は、晴々とした尊者達に私には見えました。闇の夜は明け、あかるい世界がひらけました。かえりみると二十九年間の迷いの旅の淋しさ、はかなさ、味気なさは、一声一声のお念仏に消されて、そこに頼もしさ、有難さ、よろこばしさが私の胸一杯にみちてきました。聖人の御和讃が思い出されました。

如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も、骨を砕きても謝すべし

と如来の御恩、よき人々のお慈育が身にしみてまいりました。又七百余年の昔の、聖人様の二十九歳の時のおよろこびのお姿がありありと仰がれました。

石田十九三

二十五日、私は稲津先生のお宅を訪問いたしました。その道で会う人達が皆にこやかにほほえんでいるようでありました。私の足は虚空をふむようで、先生の宅につきますと、先生は縁側に立って迎えて下さいました。そこで昨日のよろこび、今日のうれしさを語りあかしました。

その後、妻との意見もよく会い心安らかな日々をすごさせていただけはじめました。そこで、かってキリスト教の祈りの家を理想としていましたが、今は念仏裡にそうした世界が現われてきました、稲津先生が、石田さんお念仏の家になりましたね、とよろこんで下さいましたことが、今もうれしく心に刻まれております。

その後も池山先生のお勧め下さいました歎異抄を拝読しながら歩いて居りました。丁度二条城の北側から城の正門通りに出ようとしたとき、歎異抄の二章の

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

この一句は、池山先生の御講話のたびごとに、四十二歳の時の御自身の御体験をもととして「よきひととあるのを親鸞聖人とかえ、親鸞とあるのを池山とおきかえて、南無と一声申さしていただくと同時に、光の滝を浴びるように念仏がとめどなくあふれてきた」とくりかえして仰言って下さいました。私は三月二十三日午后三時頃でした、そこを思い浮かべ、私も先生の通り「石田におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人、親鸞聖人の仰せをこうむりて信ずる云々」と毎日読むことにしていましたが、たまたまその日「石田におきてはただ！」と読むと、突然お念仏が口から湧き出るように続いて申され、全身が光を浴びるように感じ、しばらく立ち止ってお念仏申しました。家に帰りましてもお念仏はひとりでに称えられて止まりませんでした。早速、稲津先生におたよりしましたら、先生からのお返事に「ただ」には二つある、どちらのただかとおたずねでありましたが、無学の私にはそれが二つあることも知らずにおりました。その時の私は、ただ、と拝読したとき、曽無一善（かって一善もない）の私ですから、阿弥陀仏があわれみ、かなしみ、はぐくんで下さったのだと、大悲大願ひとつを感佩させていただいたのでした。昨年花田先生におたずねしたところ「ただとはそのことひとつという、ふたつならぶことをきらうことばなり。またただはひとりというこころなり」との唯信鈔文意を引いてお答え下さいました。本願のおまこと一つをいただくばかりと知らせていただきました。

四月の上旬、池山先生のお宅に御礼と共に、御報告を申しあげにお訪ねいたしました。先生は笑みをうかべながら「ありがたいことです、石田さん阿弥陀様は貴方のために御苦労して下さったのが湧き出てきたお念仏でしたね、有難いことです」と非常におよろこび下さいました。更に、「歎異抄の二章の、ただ念仏して、は信心の家に入らせて頂く正門ですよ」とつけ加えて下さいました。また、「人間は煩悩具足の身ですから、お念仏がさほど有難いと思われない時もありますが、そのような時は、歎異抄の九章をよくよくお読みなさい。あそこは二章の正門に対して信仰上の裏門です、逃げようとする私共をしっかりとつかまえて引きもどして下さるのです」とご懇切なお教えをたまわり、心から御礼を申上げて帰途につきました。心は喜びでポカポカして居りました。

先生のお宅のある蓮華谷の道は両側に田甫がありまして菜の花、たんぽぽ、すみれ、れんげ草の花盛りで、おりからの夕陽に映えて極楽の園を行くようでした。白い花は白い光、黄な花は黄な光、赤い花には赤い光を映じておりましたので、阿弥陀経の「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔」と誦しながらお念仏と共に家に帰りました。

家では家内が待っていて先生のお話を致しますと非常によろこんでよろしかったねとくりかえして申して居ました。そこへ秋田様が来られました。この方は先にも書きましたが池山先生の『絶対他力と体験』を私に借して下さった方であり、妻のお針の師匠さんでもあり、同信会の同朋ですので、夜おそくまで仏法のお話を互に語り合いました。

信のあゆみ

その年の夏だったと思います、高倉会館へ岩見護先生のお法話を拝聴に参りました。私の隣席に四十以上と思われる御婦人が居られ、その隣りに十八九才の娘さんが居られ声高にお念仏を称えて居られました。しばらくそのお念仏を聞いて居りましたが、同信の方と思いましたので、私がおたずねしますと、隣席の御婦人が、一週間程前に気づかせていただきましたばかりです。この娘は病弱でしたので前から御法を聞いて居りましたが、いくらお聞きしてもわからず、一時はもう寺参りはいやになったと申しますし、私は勧めますし、そうしたことを永い間続けておりましたが、やっとお慈悲に気づかせていただきましたとのことでした。心からよろこばれる方のお念仏は聞いている者にもよろこびがつたわるようで、仏々相念とはこうしたことを説かれたのかなと思いました。そこで、これからは御恩報謝のお念仏ですねと私が申し上げますと、ありがとうございますと申されました。

○

此の年は色々と変ったことがありました。九月十九日に下鴨の京都の学生親鸞会の聖鸞寮で横田慶哉先生の有難い法話がありました。その時先生が、明日は大風が吹きますよと申されましたが、その通り昭和に入ってからの第一次室戸台風が吹き荒れ、死人も出ました。

私は朝八時に三井物産の貯炭場に行きましたが、西南の空は夕焼雲のように真赤でしたので、貯炭場の主任さんが、今日は休業しますと云われ、帰りかける頃ははや台風が来ておりました。堀川の丸太町にさしかかると馬車を引いて歩けなくなりましたので、車を路地に入れて馬だけを連れ、御所の巡査派出所の前にきた時に、巡査さんが私を見て、大風で銀杏の実が沢山おちているから拾っていったらと云われて、あちらこちらと拾い集め、ハッピに包み肩にかけて、御所の門を出ると、土堤の大木の松は根から皆傾いて根をあらわしている有様でした。そこではじめて家の

ことが心配になりました。

帰りますと、家は平屋でしたから助かっておりましたが近くの染物屋の煙突が倒れ死人が出たとのことで、怪我人も数人あり、倒壊した家もあると聞いたとき、自分の呑気なのに驚きました。銀杏を肩にして馬を連れて帰る途で、広告のトタンは飛び、瓦も飛ぶ中をお念仏しながら呑気に帰ったのだから近所の人々から度胸があるなあと云われましたが、仏様と御一緒だったからでしたと思い、有難く一入念仏申さずにはいられませんでした。

十月か十一月、京都学生親鸞会の育ての親として会員の学生達から信望のあつい花田先生が、大連から内地に帰られ、私共の同信会でお話下さることになりました。同信会も当時五十名程になっており、学生の聴聞する人も多く、会場は一杯の有様でした。

先生は、外に幸福を求めて遠くたずねて行ったチルチルミチルの話、又、ジャンバルジャンが脱獄して、誰からも相手にされず、宿にもつけないでいたのに、エミエル僧上から「ここは宿もない、食物もないあなたの家です。過去を聞く用事はありません」と温かく迎えられながら、なお恩にそむいていたのに、飽くまでも慈悲を注いで下さるので、最後にその御親切を拝みながら死んで行った話、さらに中国の有名な詩、

尽日春を尋ねて春を見ず
芒蹊、踏みあまねし隴頭の雲
帰えり来って梅花の下を過ぐれば
春は枝頭に在りて、既に十分

を引かれて、仏法を求めるにも、まず外に目を向けてさ迷わず、自分自身にかえってそこにすでに仏様の慈悲の光明がみちあふれていることに気づくことが大事で、春はわが家にあったと知らされるものです。その時、自分の愚かさや、罪業の重さで、ともすると自分から仏様をおへだてしがちでありますが、ジャンバルジャンを迎えられるエミエル僧上のように、「罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願」を弥陀仏がすでにおおこし下さっているのであります。そのあさましいわが身に寄り添うて下さる御心をきかせていただくことが大切であります。

大体以上のようなお話であったと思いますが、何分四十五年前のことで不十分な記録になりました。

（続く）

新春法信抄

○岡山　西本清人

山寺の鐘の響はこだまして
答ふる声は　山寺の鐘

○福井　長田智龍

ひとつづつお聖教（ふみ）のこころさぐりあて
生きながらへし　いのちことほぐ

○枚方　竹原てい子

日野法界寺に詣でて
幼日の祖師朝夕にこの床（ゆか）を
ふみて御拝されしかその床をふむ

○山口　平岡政信

いだかれて居るとも知らぬおろか身に
如来大悲のとどく呼び声

○東京　誉田文子

骨折をいたわりつつ
冬日さすそのぬくもりを背にうけて
我はあゆみぬ　杖をたよりに

○奈良　飯降梅子

この年もつつかなかれとくみかはす
屠蘇はおさなの笑みにはづむ

○名古屋　あらかわそおべい

学曲げず　世に阿らず　節枉げず
たとい陋巷にのたれ死すとも

○福山　橘高正樹

新年を　ただ一筋の　念仏かな

○武生　木村無相

心臓の　身をいたわりつ雑煮かな

○一宮　寺沢友三郎

初念仏　よき声と聞く　たのもしさ

○東京　亀岡邦生

日だまりに　待つ妻子らと　ふり合う手

○四国　田中克己

娘の病患　よきめの見えて　老の春
昨秋訪ひし　一茶の里は　雪ならむ

○名古屋　山内順憧

摂取不捨　弥陀願力の　今日の春

○大阪　安方八千枝

久遠劫むすびし氷今日とけて
初日宿してさらさらと行く

あとがき

彼岸の月に入りました。学徒にとっては入学、卒業、就職と生涯の思出の深いことでありましょう、人生のほほえましい一時であります。

さてかって池山先生が「客観的にみれば、信もなくてようもこの人生に平気でおれるものだ。早ければ早いほどよいが、人生においてそれなしにはどうしても越されぬ関所がある」と独語せられたことがあった。ところが最近、真実の心のよるべを求められる声なき声が巷に多く聞こえますについて、その信心の花の開ける問題について、近角先生の「親鸞聖人の信仰」から頂きました、御味読願います。

又、篤信の師、菅瀬芳英先生の愛別離苦に沈まれる人への慰問のことばをいただきました。無常の嵐の中の私共にのがれられぬ苦悩でありますが、そこに仏の大悲を仰がしていただきましょう。私自身、母と兄二人を亡くした時

愛別の悲しみ深しふかけれどわがみ仏の涙きわなし

とことあたらしく仏慈を仰ぎました。

西元様の新春の月の法味、淡々と綴って下さいました。常不軽ぼさつの面影を想起させられました。

一道会の記は、私の拙話を丁寧に榊原師がまとめて下さいました。御礼申上げます。

木村さんは幸に少康を恵まれて、今までの重症病室から一般病室に移られました。然し自内障がすすみ、読み書きに難渋していられます。手足が思うように動かぬに等しい不自由さで同情にたえません。

石田さんが奈良県に移られて、日曜の集いにも大きな穴があいたような淋しさです。唯そのなかでお念仏がパイプとなってうなづき合えることをしみじみと知らされますこの頃であります。なお石田さんの原稿は、刻明に、正直に、ありのままを書いて下さっています。正直な人生の告白は羽根をもった蝶のように人と人との間の垣根に妨げられず自由に伝わるものです。

○　○

「歎異抄身読記」は柏樹社で再版して下さいました。

〈御案内〉

○毎月第一、第三日曜、午后一時半、一道会例会。
南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。
市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。
地下鉄、新端橋下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四
毎月二十四日、午前・午後。
市バス、御器所通り。又は北山下車。
地下鉄、御器所通り下車。

○蓮光寺、修道会。毎月七日午后一時半。
（但し日曜を除く）尾西市三条板倉
名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）

編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番

印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄

発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋　一〇四七〇番
郵便番号四五七